

論文

「質実剛健」あるいは「享楽豪奢」——
1920—30年代北インドにおけるナショナリズムと
マールワーリー・イメージをめぐる一考察

小松 久恵

**Gandhian or Babylonian? : A Study of Images of the Marwari in 1920s-30s Northern
India**

KOMATSU Hisae

Abstract

In autobiographies and diaries by prominent Marwari traders, such as Jammalal Bajaj and G.D. Birla, they represented themselves as very simple and diligent men who had been eagerly supporting the independence movement under the influence of M.K. Gandhi. However, in the special issue of *Chand* magazine published in November 1929, which featured the Marwaris, they were represented as 'others' and depicted with a totally opposite image, namely fast-living, greedy, stingy, mean, conservative, backward and so on. It shows us not only the Marwari image of 'otherness' defined by the so-called elites in Northern India but also illustrates the antilogy of the elites who themselves were floundering between modernity exemplified by the material realm and tradition embodied in the spiritual realm.

要旨

著名なマールワーリー商人の自伝や日記において、彼らはガンディーを信奉し独立運動を熱心に支持する質実剛健な姿で描かれている。しかし1920年代後半に刊行された人気ヒンディー雑誌の特集には、マールワーリーは享楽豪奢で後進的な姿で表象される。自己表象とは180度異なるこのイメージは、都市部に移住したマールワーリーの「他者性」だけでなく、表象する側、つまり当時の北インドエリートが直面していた自身のアイデンティティーの揺れもまた表している。近代ナショナリストとしての自己イメージを確立するため、彼らはマールワーリーに「ミラーイメージ」としての役割を課した。

* 北海道大学スラブ研究センター 研究員

・ 2012, *Strī Asmitā Kī Khoj, Hindī Khshetra Mem Strī Dvārā Strī-Vimars 1857-1947*, New Delhi: Vani Prakashan.
・ 2012、「アメリカ人が描いた20世紀初めインドの輪郭——Mother India (1927)を読む」、奥山直司・田中雅一（編）『コ
ンタクト・ゾーンの人文学 4』、晃洋書房、83-100頁。

1 はじめに

1.1 本稿の目的

本稿は1920年代後半から30年代にかけて、北インドを中心とするヒンディー語圏で非常に人気のあった雑誌におけるマールワリー表象を分析するものである。マールワリーとは一般に、ラージャスターンをその出身地としムンバイやカルカッタに移住し成功した商業コミュニティであるとされている。彼らは新参者であるにもかかわらず、移住先の大都市で経済的に成功をおさめ、富裕層を形成していくことになる。その結果として地元の社会からは嫉妬と軽蔑のまなざしを向けられ、「他者」としてのイメージが定着していく。

本稿においては、第一に当時の北インドの人々の目にマールワリーがどのように映っていたのか、またコミュニティはその外からのイメージにどう反応したのかの二点を、1920年代後半から30年代にかけて北インドを中心とするヒンディー語圏で非常に人気のあった雑誌を用いて考察する。これらを併せて考察することで、自己表象と他者表象の間の齟齬を明らかにすることを目指す。第二に、ナショナリズムが高まりゆく時期にマールワリーが作り上げようとした自己イメージ、ならびにコミュニティとしてのアイデンティティを解明する。同時にマールワリー表象を切り口として、植民地支配下の北インドでのエリートたちのアイデンティティの揺れについて考察し、それぞれのアイデンティティの構築に「ナショナリズム」が果たした役割を明らかにする。

なお本論で取り扱う雑誌・新聞記事は、特に断りがない限り全て2008年-2012年を中心に Nāgarī Pracārīnī Sabhā 図書館（ベナレス）、ベナレスヒンドゥー大学図書館（ベナレス）、Nehru Memorial Museum & Library（ニューデリー）、Mārvārī 図書館（デリー）ならびに東京外国語大学付属図書館で論者が行った資料調査の結果である¹⁾。

1.2 自己表象と他者表象の齟齬

論者のマールワリーとの出会いは、独立運動の際のその献身的な働きから「ガンディーの5番目の息子」と称されたバジャージ財閥創設者ジャムナーラール・バジャージとその妻ジャーナキーデーヴィ・バジャージ (Jānakī devī Bajāj) の自伝と日記を通じてであった。ジャーナキーデーヴィの自伝『私の人生』(Merī Jīvan Yātrā) は、インド独立運動に参加したマールワリー女性による唯一の自伝だとされる。自伝の中心となるのは、敬愛する夫ジャムナーラール (Jamnālāl Bajāj) の導きで独立運動に参加するジャーナキーの奮闘ならびに葛藤である [Komatsu 2005]。彼女のこの自伝や夫ジャムナーラールの日記からは、ガンディーに傾倒しその教えに忠実であろうとする夫妻とその周囲の人々の質実剛健な姿が浮かび上がってくる。バジャージだけでなく、ガンシユヤーム・ダース・ビルラー (G. D. Biplā) はじめとする著名なマールワリーの自伝、伝記の多くには、質素な生活スタイルと社会奉仕が強調されており、それらのマールワリー自己表象に共通するのは質実剛

健で社会貢献に熱心な姿であった。

しかし上述の通り他者として描かれるマールワリー像は大きく異なる。1950年初頭の聞き取り調査をもとにした論文には、マールワリーが蔑称として使用される例——特にしつこい値切りやケチな人への「Why are you acting like a Marwari?」という言説など——が紹介されている [Millman 1954: 6]。「マールワリー」は貪欲、吝嗇、保守的、因習墨守、闇商人、しつこいバーゲニングといったネガティブなイメージを含んだ蔑称として認識されており、その影響でカルカッタにおいてはマールワリーたちが三世、四世になるとその出自を否定するようになっていくという興味深い報告もある [Millman 1954: 5]。そしてこの偏見ともいえるべきマールワリー・イメージは現代もなお力を持っている [Hardgrove 2004: 13-14]。このようなイメージのずれ、つまり自己表象と他者表象の間の齟齬はどのように生じてきたのだろうか。また正のイメージと負のイメージの相互の関係はどのようなものだろうか。

1.3 人気雑誌チャーンド

1920年代後半、人気ヒンディー語雑誌チャーンド (*Cāñd* 1922-49) には、「マールワリー」はすでにネガティブなイメージで登場している。チャーンドは1922年に北インド、アラハバードより発刊された当時の北インドを中心とするミドルクラスに最も普及したとされるヒンディー月刊誌であり、北インドを中心に全国の多様な時事問題を取り扱う総合誌の性格を備えていた²⁾。年間購読料は6.8ルピーで当時の他雑誌と比べると割高ではあったが、毎号80から100頁で構成され、詩、短編、連載小説、国内外ニュース、各種論文(社会・政治問題)、書評、音楽、家政(家庭の医学、調理、裁縫、育児、美容、健康)、読者投稿欄、写真(社会活動家、政治家等、国内外女性多数、集会)、イラスト(宗教、風刺)など幅広い内容が含まれた非常に充実した構成の雑誌であった。

チャーンドは女性の地位向上を目標に掲げて創刊された [*Cāñd* (以下CD) 1922 Nov: 2-3]。初代編集長サハガル (Rāmraḥ Siṃh Sahagal) は読者投稿欄を充実させ、読者女性からの投稿に常に同情的であった³⁾。彼のこの編集姿勢は読書経験、執筆経験等を通して女性に「個」としての空間を与え、公共圏への参加機会を促したといえる。また女子教育、寡婦再婚、参政権、パルダールなど女性問題をめぐる議論を多く掲載しただけでなく、当時としては非常に革新的な離婚や再婚の自由といった女性の権利を支持し続けた。

女性の地位向上を目指す雑誌として始まったチャーンドであったが、記事として取り扱うテーマが常に女性問題に限定されていたわけではない⁴⁾。またその内容は時代とともに社会問題全体へ、そして政治問題へと移行していく。チャーンドは「女性のための雑誌」以上の存在であり、社会運動の旗手としてまたオピニオン・リーダーとして大きな役割を果たしていた。月刊誌であったが、ほぼ年二回の割合で様々な社会問題を扱った特集号——寡婦特集(1923年3月)、女性特集(1923年12月)、サティール特集(1926年9月)、不可触特集(1927年5月)、絞首刑特集(1928年11月)、

女性運動特集（1934年11月）等々——が発行された⁵⁾。社会の向上に役立つ多様な記事、そして明確な文章が当局によって高く評価され1925年5月には公立教育施設ならびに図書館の奨励図書に指定されている。

チャンドがマールワリー特集号を発表した1920年代後半は、北インドでインド民族運動がふたたび大きく盛り上がった時期である。市民の間にも不服従運動が普及しナショナリズムの波が高まりゆく中で、チャンドは次第に反英方針を明確に打ち出すようになっていった。1928年には絞首刑特集号を組み、また1929年には著名な国民会議派の活動家によるナショナリズム史「インドにおける英国統治」“*Bhārat meṃ Aṅgrezī Rājy*”を数号に渡って連載し、読者に愛国心を強く訴えた。自身も非協力運動に参加し、会議派と共に活動していたサハガルは、チャンドにおいて一貫して独立運動を支持し、関連記事や写真を多数掲載している⁶⁾。この反英方針に基づいた出版活動は当局によって警戒され、雑誌と同名のチャンド・プレスは同誌やその他出版物の押収や罰金処分を受けている。また1929年には複数の州でチャンド誌の奨励図書指定が取り消されるなど、経済的に大きな打撃を受けた [Śrīdhar 2008: 682]。しかし当局からのこのような処分は、逆に世論からの同情と評価を集め多くの支持を得ることにつながった。日刊紙アーリヤ・ミットル (*Ārya Mitr*) やボンベイ・クロニクル (*Bombay Chronicle*) を始めとする当時の新聞雑誌には、愛国者サハガルを称えチャンドに同情を寄せる記事が掲載されている [*Ārya Mitr* 1929.9.19 “Cāṅḍ par Saṅkaṭ”; *Bombay Chronicle* 1929.5.30 “Stand by the Chand” など]。

一方それとは逆の意味で、つまり酷評されたことで大きな話題となったのが、絞首刑号から一年後に発行されたマールワリー特集号であった。雑誌辞典によれば「絞首刑号は政府の怒りを招いたが、チャンドは名を上げた。マールワリー特集号は社会の怒りを引き、その名声を台無しにした。そこから浮上するには時間がかかる」とされる [Śrīdhar 2008: 683]。以下の章ではこの悪名高い「マールワリー特集号」を取り上げる。

2 マールワリー特集

2.1 ジャーティ特集「第一号」

さまざまな社会問題を特集号のテーマに取り上げてきたチャンドが1929年11月号で特集したのは、マールワリー・コミュニティをめぐるものであった。特定コミュニティを特集号で取り上げる意図については既に1929年5月号で「ジャーティに関する特集号」の開始が宣言されており、そこでジャーティ・シリーズの意図が二点述べられている⁷⁾。第一点として、他ジャーティについて知ること。インドの現状に関して編集者は「一つの国に暮らしているながら、自分とは別のジャーティの者に関して我々は殆ど何も知らず、別の世界の生き物とみなしている」と述べている。その状態を改め互いの隣人を知るために同シリーズが企画された。第二点として社会全体の発展のため。このシリーズによって自身のジャーティが持つ悪習・因習を指摘され、それに直面することは非常に

不快なことではあるが、本当の意味での発展のために必要なのは賞賛ではなく欠点を知ることができ、それが記された。読者の反応、評価を見ながら主要なジャーティ全ての特集を組むことが目標とされ、シリーズ全体の編集はチャトゥルセン・シャーストリー (Catusen Śāstrī) が行うとされた [CD 1930 Jan: 530]。

マールワリー特集はこのシリーズの第一号として発表された。以降カナウジ特集、カーヤスタ特集が組まれたという記述もあるが、管見の限りではそれらを実際に確認していない。実質ジャーティ・シリーズはこのマールワリー号のみであると断言するのは早急であり、より詳細な調査が必要である。しかし少なくとも同特集号のように世論を賑わす特集号が存在していないことは確かである。この点に関しては第4節第3項で再度述べたい。編集責任は先の発表の通り、前年の絞首刑特集号の編集としても名を挙げたシャーストリーとされるが、別の人物によるものであったという説もある⁸⁾。全490頁の特集号は、マールワリーをめぐる多様な記事で構成されたが、その大半がマールワリーの文化風俗の後進性を批判するものであった。また中でも特筆すべきは、約50枚にもなる多様な風刺画の存在である。以下、特集号の構成を詳細に見ていく。

2.2 「マールワリー」とは誰か

「マールワリー」という呼称は何（誰）を指すのか。その定義は様々である。カルカッタのマールワリー・コミュニティを研究したハードグロヴは「マールワリー」をエスニック・ラベル (ethnic label) あるいはエスニック・タグ (ethnic tag) とする。彼女によれば「マールワリー」の境界線——誰が含まれ誰が含まれないのか——は常に議論の対象であり変化し続けている [Hardgrove 2004: Preface to the Indian Edition]。「マールワリー」は語源的にはマールワール (*Mārvārī*) 地方出身者を指すが、実際にはそれ以外のラージャスターン地域の出身者を多く含む [Timberg 1978: 10-11; Taknet 1990: 3]。たとえばマールワリーの主な移住先である都市部、特にカルカッタにおいてアグラワール (*Agravāl*) は最も目立った存在であったが、その大半がシェーカーワト地域の出身であることからこの地域出身の商人がマールワリーであるという印象が強い [Timberg 1978: 186; Birla 2009: 18]。

特集号においてもその定義は一樣ではないが、そこに現れる「マールワリー」を論者は以下の二つに大別する。第一にラージャスターン、特にマールワール地方に暮らすあらゆるカーストを含む全員、第二にラージャスターン出身の都市部に在る商人である。そのうち一に関してはマールワリーを「ムガル支配と最後まで闘った勇敢なヒンドゥー」だとする記事が数本見られる。しかしこの定義はマールワリーの勇敢さを称えるためではなく、過去の栄光と比較して現在の凋落ぶりを強調するために用いられる。その一例として特集号最初の記事である編集記を見てみると、一頁目から「マールワール全体が眠り続けている！」という言葉が何度も続きマールワリーの墮落が描写されている [Cañd 1929 Nov *Mārvārī* (以下 CM) : 1-3]。また地域全体の概説記事においてマール

ルワールの「一般の人々 (sādhārāṇ log)」の食事、服装、職業、教育、生活スタイルが約35頁に渡って紹介され [CM: 99-135]、同記事に添えられた複数の写真のキャプションには「マールワリー・ムスリム」「マールワールのヒジュラ」「マールワリー・アヒール」「マールワリー・ナーイー (床屋)」(図1)「マールワールの農民の生活」(図2)等が記されている。しかし8割以上を占める残りの記事は、第二の分類である「田舎(ラージャスターン地方)から出てきた金持ち商人」の表象に偏っている。その割合の大きさから、特集号の主題が商人コミュニティの後進性批判にあったことが明らかである。



図1



図2

2.3 何が論じられたのか—特集号を構成する記事⁹⁾

最も長大な記事は編集者によるものであり、そこではマールワリーの歴史、文学、風習、特徴などが64頁に渡って紹介されている。記事は「700年の間ムガルの血塗れの剣の前に立ちはだかった勇敢なマールワール、それが今や眠り続けている！」という一文から始まり、「町中、村中、森や林、畑、いたるところでマールワールは眠っている。国中が覚醒しているというのに、マールワールは眠っている！」と地域全体の停滞ぶりが強調される [CM: 1]。この記事以外にもマールワリーを「ムガルに抵抗した勇敢なヒन्दウー」として描く記事が数本見られるが、それらはいずれも現在の墮落ぶりを強調するための前振りとなっており、編集記においても農村部の停滞、貧困とその現状について都市部の大商人が無関心であることが批判されている¹⁰⁾。

マールワール地域(というよりむしろラージャスターン全体)の後進性は“Kuch jānne yogya bātem (知っておくべきいくつかの事柄)”と題された40頁弱の記事にも強調される。ここでは地域の一般の人々の文化風俗が、食事、衣類、職業、教育、結婚などの項目で紹介されている。もっとも一般の人々の紹介だとあるが、実際に中心となるのは貧しい農民の困窮ぶりについてである。記事は地域における教育普及や公共福祉の停滞を指摘して後進性を示し、その責任を民衆の福祉に無関心な藩王に問うている。また農民の困窮の責任を上位カーストの搾取に求め、地域の後進性は封建制度に起因

するとする [CM: 99-135]。

しかし上述した記事を除くと、特集号に寄せられた記事の殆どは都市部に移住した商人、中でも成功した富裕な商人、セート (*Seth*) とその妻セーターニー (*Sethānī*) を取り上げたものである。セートの財産は賭け事や相場、外国事業との仲介で荒稼ぎした不浄な金、あるいは貧しいものから情け容赦なく取り立てた罪深い金 (*apavitr / pāp kī kamāī*) で成っているとみなされている。またその使い道においても、男性は饗宴や阿片などの享楽にふけり [CM: 288]、女性は装身具に夢中になるさまが揶揄されている [CM: 169, 172-173, 197-200]。マールワリーが熱心に行う慈善事業についても、寄進は汚れた金によるものであり、自己顕示あるいは欺瞞でしかなく尊敬に値しないと断じられている [CM: 58-64]。「マールワリー」を「かの有名な強欲商人シャイロック」と同義であるとする一文も見られる [CM: 182]。

さらに頻繁に言及されたのは、セート夫妻がもつ文化的な後進性と性モラルの低さに関してである。後進性に関する指摘は大きく二つに分けられる。ひとつは厳格な女性隔離の慣習 (パルダール) に関するもの [CM: 36, 41-45]、もうひとつは幼児婚並びにミスマッチ婚 (年配男性と幼女の結婚) などの結婚をめぐるものであり [CM: 50-58, 195-196]、それぞれ因習を墨守していると批判されている。また性モラルの低さを指摘した記事の多くはマールワリー女性が公共の場でも肌を露出し、往来で猥褻な歌を歌うことを指摘する [CM: 37, 44-46, 173-174]。さらにセートの留守中、セーターニーが性的な欲求不満を解消するために使用人や親族の若い男性と関係を結び、あるいは早朝の寺院参拝を口実に逢瀬を繰り返していることが、書き手の「知人」が実際に体験したこと、あるいは見聞きしたこととして記されている [CM: 29-38, 38-50, 155-157, 169-179]。これらの記事の多くは非常に扇情的であり、そして編集記以外は匿名によるものであったことを付け加えておきたい。またこれらは後日寄せられた反響の中で最も多く言及され、激しい反論を招いている。

このような記事から浮かび上がってくるマールワリーの姿——粗野で下品なセート夫妻——は、記事の間に挟まれるイラストによってさらにカリカチュアライズされ、強調されている。

2.4 何が描かれたのか—記事を強調するイラスト

特集号の一つの特徴として、約 50 枚にもなる痛烈な風刺画が掲載されていることが挙げられる。これらは特集号の印象を決定する非常に大きな要因となっている。また風刺以外の挿絵も含めると相当数のイラストが掲載されており、当時の雑誌で一度にこれほど多くのイラストが掲載される例は論者がこれまで行った調査では見つかっていない¹¹⁾。挿画の中にはいくつか見事な多色刷りの図版も見られる。風刺画のテーマは以下のように大きく三つに分類される。

第一にコミュニティの後進性、因習にとらわれている点に対する揶揄である。特にパルダールを固守して (させて) いる点 (図 3) と、年老いた男と幼い娘のミスマッチ婚 (図 4、図 5) が多く取り上げられている。



図3 「半可通！」



図4 「お迎え間近でも結婚！」



図5

二点目はセートへの批判、嘲笑である。セートたちの享樂にふける様子（図6、図7）や会議内容および英語を理解したふりをして見栄を張る様子（図8、図9）が戯画化されている¹²⁾。また一連の絵物語（図10、図11）では商売熱心なセートの留守中にセーターニーが不貞を働き、それを目撃しながらも裁判沙汰、警察沙汰になった場合の後始末を面倒に思い、何も行動に移さないセートの様子が揶揄されている。



図6 饗宴



図7 阿片まわしなめ



図8 英語が読めないのをごまかす



図9 隣の人に多数意見を聞く



図10 妻の不貞を目撃



図11 間男を殺したらその後はどうなる？

三点目は女性の慎みのなさ、性モラルの乱れに関するものである。非常に保守的でパルダールを厳格に守っているとされているマールワリー女性であるが、ここではその言説は「顔さえ覆えばそれで良いと考え」「パール越しに猥歌を歌い夫以外の男性とふざけ合う」[CM: 45]と読みかえられる。彼女らは腹部や腰が露出した、あるいは肌が透けるような薄い布を好んで着用し、プラットフォームなど衆目の中で沐浴をするといった公共の場での露出が批判的に描かれている(図12、図13)。また留守がちな商人の妻は欲求不満であり不貞を行っているという言説が、使用人との密接な関係を示すイラスト(図14)ならびに早朝の寺院参拝の際に逢引きが行われるという文章に添えられたイラスト(図15)によって具象化されている。



図12 顔さえ覆えばそれで充分



図13 プラットフォームの沐浴



図14 使用人に脚を揉ませる



図15 聖者廟参りにて

3 特集号が示唆するもの

3.1 書き手は誰か？

先にも触れたハードグローヴの研究は、19世紀後半から20世紀現代までの長いスパンでカルカットのマルワーリー・コミュニティを対象とし、インタビューや文献調査を元にそのアイデンティティ形成を丹念に追ったものである。その著書においてハードグローヴは、チャンドのマルワーリー特集号の編集者を、同雑誌に明記されているチャトゥルセンではなく、「Rajagopal Mohatta」という社会評論家が行ったとする[Hardgrove 2004: 206]。仮に彼が編集者であるとすれば、自身もマルワーリーであるモハタによる編集——しかも名を伏せたまま——は、コミュニティ内部からの啓蒙活動であると解釈することができるだろう。しかし今のところその論拠を特定することはできない。「Rajagopal Mohatta」という人物の名は管見の限りでは特集号には出てこず、実際の編集がこの人物によるものであったと結論づける証拠は存在しないのである。むしろ特集号に対する複数の批判においてはチャトゥルセンが名指しで編集責任を批判されており[Bhārat (以下 BT) 1929.12.2/12.9; Mādhuri (以下 MD) 1931 July など]、さらに後のチャンド誌にも「マルワーリー特集編集者アーチャールヤ・チャトゥルセン氏の声明」というタイトルで特集号批判に対するチャトゥルセン自身の反論が掲載されている[CD 1930 Jan: 542–544]。

使用言語に目を向けてみよう。記事の大半はヒンディー語によるものであったが、風刺画のキャプションや小説のいくつかはマルワーリーならびにラージャスターニーで書かれており、筆者には完全な解読は不可能であった(ある程度の推測は可能)。ヒンディー語ネイティブならば解読が可能であったが、それでも全員が理解できるわけではなかった。ここでこれらのキャプションを書いたのは誰なのか、という問題が浮上する。マルワーリーあるいはラージャスターニー語を理解する人物、という条件を考えたとき、書き手がマルワーリー自身であったという可能性を無視することはできない。つまり社会改革派のマルワーリーが、チャンドを利用して帰属コミュニティの社会的地位の上昇を目指したという可能性も捨てきれないのである¹³⁾。

3.2 構成から読み取れるもの

前述のハードグローヴの著作において、この特集号はマルワーリー・コミュニティ内部の対立、つまり保守派と改革派(Sanatani/Reformists)の争いの激しさを示す一例として取り上げられている[Hardgrove 2004: 206]。確かに特集号の中にはコミュニティが二分されていて保守派が改革派の妨害ばかりしていると述べる記事もあるが[CM: 188–192]、論者が見るところそれはごく一部でしかなく、記事の大半はマルワーリーを一つのコミュニティとして取り扱っており、中でも「カルカット在住」のマルワーリーをめぐる表象を中心に構成されている。また掲載されたマルワーリー名士のポートレートは、その7割近くがカルカット在住者のものであった¹⁴⁾。カルカットはマルワーリーの移住がもっとも顕著に見られる都市であり、商工会や商業協会の本部を有するマルワーリー・コ

コミュニティの活動中心地であった [Timberg 1978: 186-197]。センサスに現れる通り、1920年代後半からラージプターナーからカルカッタへの女性移住者数が急増する¹⁵⁾。特集号発行時は、マールワリー商人の家族単位での都市部への移住が進み、都市生活が本格化した頃であった。言いかえれば、カルカッタにおいて移住者マールワリーの生活が目立つようになった時代である¹⁶⁾。マールワリーに向けられた否定的なまなごしは、普遍的に存在する「移住者に対する地元からの風当たりの強さ」という現象でもあるだろう。土着の人々、つまりベンガル人からの富裕なマールワリー商人に対するねたまならびに文化摩擦が¹⁷⁾「ベンガリー対マールワリー」という図式を創り出し、ネガティブなマールワリー表象の一要因となるのである。

また特集号の前半には、これまで見てきたようにマールワール地方の後進性を露わにするような記事ならびに写真が多く掲載されている。それらの表象と、後に続く成功したマールワリーたちのポートレートには大きなギャップがある。そのギャップが大きいだけに、都市に移住し商売で成功して洗練されたように見えようとも、マールワリーはしよせん後進的な地域の出身者、いわゆる田舎者なのだというメッセージが一層明らかになる。単純化した図式ではあるが「ベンガリー対マールワリー」という二項対立的図式には、「都市生活者対田舎者」あるいはまた「近代対伝統」という項目を加えることができるだろう。

しかしこの表象をめぐる書き手と対象の関係を、二項対立的な単純化した図式だけで理解することは果たして可能であろうか？北インド都市部エリート——記事の書き手でありまた読者の多数を占める人々——とマールワリーとの関係をより深く考察するために、複数のイラスト、中でも「市民のまなごし」に注目してみる。

3.3 対立する「伝統」

注意深く風刺画を眺めてみると、セート夫妻の振る舞いを眺める観察者の存在に気が付く。イラストの中、円で囲んだ箇所注目してみよう。図16では煙草とステッキを持ち靴を履いて意気揚々と歩く夫の後ろから、裸足で腹部を露出した妻が大きな荷物を頭に載せ、両脇に子供を抱えて続く。図17ならびに18は近代文明の象徴ともいえる駅のプラットフォームが舞台である。パルダーのため足元がおぼつかない様子の女性(図17)ならびに衆目を気に留めず使用人の手伝いで沐浴をする女性(図18)が、男性の視線を集めている。図19では往来にも関わらずセーターニー——一般的な表象として彼女らの興味関心は装飾品にのみ熱狂的に向けられるとされる——が腕輪を選ぶのに夢中になり、腕輪売りの男性に密着している。このように夫妻が田舎(ラージャスターン)から「お国文化」を持ち込み、移住先の都市を我がもの顔で闊歩する様子に「市民」が眉をひそめ、嘲笑している。



図 16



図 17



図 18



図 19

観察者たちのこのまなざしの根底にあるのは、セート夫妻の「後進性」に対する批判である。この批判はマールワリーの文化風俗が都市のそれとは異質なものであり、かつ劣位にあることを前提とする。しかしこれを「都市＝近代／農村＝伝統」の二項対立的図式にあてはめて理解するのは単純にすぎる。なぜならば傍観者、観察者である北インドエリートたちにとっても、「伝統」は自らのアイデンティティー構築のために必要なツールとなるからである。

ナショナリズムが高まりゆく 1920 年代後半、近代エリートは英国との関係において自らを対等な立場とするだけでなく、むしろ優位に位置付けるために「ヒンドゥー理想像」を必要とした。その理想像には西洋近代に対抗するために「伝統」が不可欠であったが、その伝統とは二項対立的に「近代」と矛盾するものではない。つまり後進性や非文化的、野蛮と結びつくものであってはならなかった。

ゆえに反英、貞節、反物質主義を掲げる「再編された伝統」を主張する必要がある。彼らはその自己イメージ、アイデンティティーを確立するために、「ミラーイメージ」としての役割をマールワリーに課したと考えられる。従ってマールワリーには親英、物質主義、性モラルや教育の面での後進性、野蛮性というレッテルが貼られ、「墮落した伝統」が押しつけられたのではないだろうか。

3.4 二重のスケープゴート

イラスト中の観察者のまなざしの中で、マールワリーは二重の負のイメージを背負わされている。第一に英国をはじめとする「外」からの「インド」イメージである。その後進的で野蛮なイメージを否定するための読み変えに、マールワリーが利用された。たとえば図18には観察者として英国人が描かれ、衆目の中で沐浴をするセーターニーに批判の目を向けている。後進的で野蛮なのはインド全体ではなく、一部、つまりマールワリーでしかないという言説を成立させるために、マールワリーはインド全体の後進性を背負わされた。

第二に、英国が持ち込んだ西洋文化、通俗性を体現するものというイメージである¹⁸⁾。複数のイラストにおいて「近代文明」は称賛の対象ではなく、セート夫妻の中途半端な西洋近代化を揶揄するためのツールとなっている。マールワリーは「あるべきインドの理想像」に反する集団として、その「西洋かぶれ」が非難的となった。英国が持ち込んだ通俗性は男性の姿——ステッキ、タバコ、ジャケット、靴、カバン——に現れ、それと対照的に女性は「伝統的」な姿——裸足、パルダ、伝統衣装での肌の露出——で描かれる。両者を並べて描くことによって夫婦のミスマッチぶりが露わになり、さらに荷物を全て妻に持たせて一人前を歩く夫の姿からは、マールワリーの「西洋化」が中途半端で表面的なものでしかないことが明らかにされる（図3、図16）。図3に添えられた「半可通！（*adhkacre!*）」というキャプションにはその中途半端な様子に対する揶揄がはっきりと現れている。

外からは後進的なインドイメージを押し付けられ、内からは「理想のヒンドゥー像」に反する集団とみなされ、マールワリーは二重のスケープゴートに仕立て上げられた。

4 特集号への反響

4.1 コミュニティによる抗議活動

発行の二カ月前から、カルカッタのマールワリー商業協会が中心となって特集号の刊行反対運動が行われた [CD 1930 Jan: 532–534; 1930 Mar: 862]。協会は会員や新聞、雑誌に向けてボイコットや原稿引き上げを依頼する以下のような手紙を送っており、この通達に従って複数の協会メンバーがチャンド誌に原稿や写真の返却を求める手紙を書いている [CD 1930 Jan: 537–538]。協会が送った手紙は後にチャンド誌上で公開された [CD 1930 Jan: 533]。

(1929年9月25日付)

猥褻な本を多く出版してきたチャンド・プレスから、雑誌チャンドのマルワーリー特集号が発行されることが決定されました。そのようなところから出る雑誌が、マルワーリー社会をめぐってどれほど猥褻で下品な記事を書けるのか、想像に難くありません。会員の皆さんにも記事や写真の提供が呼びかけられているようです。賢明なる会員のみなさんがこのような雑誌に、記事や写真を供出するようなことはないと思っています。けれどももしも供出してしまった場合は、今すぐ、雑誌が出版されてしまう前に、それらをお引き上げください。またこの件に関して周囲の皆さんにもお知らせください。

しかしボイコット呼びかけや原稿引き上げの依頼等にもかかわらず特集号が刊行されると、引き続きマルワーリー商業協会が中心となって排斥運動を行ったとされる。当地のマルワーリー・コミュニティの中心人物である G. D. ビルラーはガンディーに不快を訴え、排斥運動に巻き込まうとした。またベンガル総督に出版差し止めの助力を依頼しようとしたり、名誉棄損でチャンドを相手に訴訟を起こそうとしたという記述もある [CD 1930 Mar: 862]。コミュニティの若者がチャンド編集者のサハガルを直接攻撃したことも報告されている [CD 1930 Jan: 539-540]。またあるマルワーリーは、編集部が発行中止を求めたがその抗議が無視されたことを苦々しく記している [CD 1930 Mar: 863-867; Agrasenputra 1940: 61]。長年チャンド誌への寄付を行っていたことを付け加えている点から、特集号の後にチャンド誌が陥った経済的困難のひとつの要因が推測できるだろう。

4.2 反論内容

特集号に対する反論、反響は、その発行後数カ月にわたってチャンド誌のみならず複数の雑誌、新聞にも現れた。その反論はいくつかのパターンに分類される。まず、最も多く目につくのは特集号の表象様式（イラスト、キャプション、小説等）の猥褻さ、低俗さに対する批判である。特にイラストに添えられたキャプションは「娼婦でさえ顔を赤らめる」「婦女子には見せられない」と批判され、反論者によっては「私の文章が穢れてしまうから詳しくは引用したくない」とまで述べた [BT 1929 Dec: 6-7; CD 1930 Apr: 968; MD 1930 Jan: 1042]。

第二に反論者が強調したのは、後進性はあるがそれでもコミュニティ全体が経済的にも教育的にも、急激に発展しつつあるという点である。その急激な伸び率はどのコミュニティにも負けないという自負が主張されている。またマルワーリー文学の研究者は、伝統的なマルワーリー文学の水準が非常に高いものであり、ヒンディー文学のそれに遜色ないどころか、さらに優れていることをいくつもの例をあげて提示し、それをコミュニティの文化水準の高さの証拠であると主張した [Tripathī 1987]。

第三は指摘された社会悪（公共の場での女性の猥歌、幼児婚、ミスマッチ婚）を認めながら、そ

それを批判する執筆者たちのコミュニティの清廉さを疑問視し、批判する資格の是非を問う言説である。たとえば抗議活動の中心であったマールワリー商業協会は、会員や各紙に送った手紙に次のような一文を載せている [CD 1930 Jan: 534]。

特集号でマールワリーを批判している紳士たちは、他の社会や自身のコミュニティにはいかなる不備、欠点もないと考えているのか。それを棚に上げてマールワリーの改革のみに必死になっているとは。

興味深いことに、これはキャサリン・メイヨー Katherine Mayo の悪名高い『マザー・インディア』 (*Mother India*, 1927年) に対するインド人エリートからの批判方法と全く同じパターンである [小松 2012]。実際に数名は特集号とメイヨーとの類似を次のように指摘している。彼女が『マザー・インディア』で植民統治を正当化するためインドの後進性ばかりを取り上げたように、この特集号はマールワリー社会のマイナス部分ならびに後進性にばかり注目している。マールワリー社会のプラス部分には目を向けようとせず、平等な視点で描かれていない。またアメリカ人の彼女は自国の欠点を無視してインドを批判している。それと同じように特集号の協力者は自分のコミュニティの欠点、不足を無視してマールワリーばかりを批判する [BT 1929 Dec: 7; CD 1930 Jan: 534; CD 1930 Feb: 756; CD 1930 Apr: 969 など]——これらの批判から、マールワリーとの関係において北インドエリートの視点が植民者のそれと同じものになっていることが明らかになる。もっとも反論者にとってもコミュニティの後進性は、ある程度は認めざるをえないものであった点にも留意しておきたい。

第四にあげられるのは、この特集号の意義を問うものである。このような下品で猥褻な文章やイラストが、一体どのようにマールワリー・コミュニティの発展につながるのか。またチャンド本来の目的である女性の地位向上にどのように有益なのか。さらにコミュニティの欠点ばかりが強調されたことは、他コミュニティとの関係の悪化に結びつくのではないか。特に移住商人として国内に離散しているマールワリーは、多くの土地でマイノリティ、アウトサイダーである。その立場がさらに悪化するのではないかという疑問が呈された [CD 1930 Mar: 535]。

4.3 チャンドに及んだ影響

このような特集号に対する反論が、反論に対する反論、特集号を支持する記事などと一緒にその後数年に渡ってチャンドやその他の新聞雑誌に掲載され続けた¹⁹⁾。その他にも 1933年の編集長サハガルの責任引退ならびにその後に見られた特集号の変化を、マールワリー特集がチャンドにもたらした影響としてあげることができるだろう²⁰⁾。マールワリー特集の翌年5月号として、チャンド誌では別のジャーティ (カナウジ・バラモン) を特集することが予告されていた。しかしその

カナウジ特集となるべき号は実際には存在しない。後の号に「カナウジ号を取りやめたのは賢明であった。マールワリーのみならずカナウジの人々まで敵に回すところだった」とするエッセイが掲載されていることから [CD 1931 Nov: 144]、マールワリー特集号がおこした波紋が推測できる。マールワリーを第一号とし、全ての主要ジャーティを特集するはずであったジャーティ・シリーズであったが、その後の特集にはそれらしきものが見当たらない。またマールワリー特集の2年後にはラージプターナー特集が組まれたが、そこには扇情的な風刺画も文章も存在しない。逆に当地出身の成功した商業コミュニティとして描かれるマールワリーは、統治者である藩王の圧政の被害者であり、かつ慈善の心にあふれた民の救済者として表象されている [CD 1931 Nov: 10-11, 45-46]。チャンド誌において、マールワリーに対する他者表象は2年の内にまったく別のものへと変化したのである。この変容に関しては、マールワリーがナショナリズムの担い手として台頭していったこととも併せて考える必要があるだろう。

5 おわりに

最後に、特集号がマールワリーにもたらしたものを考察しておきたい。そもそも筆者のマールワリーとの出会いは先に述べたとおりジャムナーラール・バジャージ夫妻の自伝と日記を通じてであった。そこに現れる質実剛健な姿は、数多くのマールワリーの自伝、伝記に共通する姿である。これまでの章で見てきたような他者表象とは180度異なる彼らの自己表象は、質素な生活スタイル、ガンディー信奉、独立運動の経済的支援、慈善活動が強調されたものであった。成功したマールワリーたちが繰り返し強調する自己表象からは、旧来のネガティブなマールワリー・イメージを払拭し新たなイメージを構築しようとする努力を読み取ることができる。彼らはチャンドの特集号に代表されるような外から貼り付けられた偏見、西洋かぶれの享楽豪奢な商人といういわゆる「植民地権力の共犯者」イメージを否定し、ガンディーを支持し独立運動を積極的に支える質実剛健なインド市民というナショナリストとしてのアイデンティティを形成しようとした。

また都市部のマールワリー商人は、特集号に対する反発や否定のために様々な活動を集団でおこなった。それによってサブカーストを超えた、あるいはサブカーストを結ぶ、一つのコミュニティとして団結したアイデンティティが構築されたと考えられる。実際、チャンドに寄せられた文章の中には、特集号の作用として「このような『危機的状況』においてマールワリー社会は肩を並べて団結した」とマールワリー内部の団結を記すものもある [CD 1930 Mar: 863]。さらに1935年には全インドマールワリー連盟 (Akhil Bhāratvarshīya Mārvārī Sammelan) が、カルカッタ以外の地域も視野に入れたコミュニティ全体の経済的、社会的発展、そして社会的な地位の向上を目指すことを目標に発足した。発足時には「ラージャスターン、ハリヤーナー、マールワおよび近隣地域の生活スタイル、言語、文化を有するもの」として新たに「マールワリー」が定義され、コミュニティ全体としてのアイデンティティが確認された [Taknet 1990: 3; Hardgrove 2004: 210]。連盟の発足と

特集号の直接的な関係を証明することはできない。しかし少なくともこの特集号は、そこに表れた「他者表象」に対する抗議活動につながり、それによってマールワリー・アイデンティティーが再確認され、そして広く共有され拡大していった契機の一つであったといえるだろう。

本稿ではマールワリーを他者として表象した北インドエリートにも注目した。彼らは自らを近代ナショナリストとして位置付け、マールワリーにミラーイメージとしての役割を求めてその後進性を批判して啓蒙しようとした。彼らはメイヨーのような植民者による偏ったインド表象——西洋近代に対する「他者」としてのインド——を批判しながら、特集号においてはまさにその視点でマールワリーを他者として扱っている。そこに彼らのアイデンティティーもまた、揺れながら変容している過程をみることができるだろう。マールワリー特集号に現れるマールワリー表象には、1920年代後半から30年代にかけてインド社会で強化されていくナショナリズムのありようと、インド社会に及んだ影響の一端が明示されているのである。

付記

この論文は科学研究費補助金基盤研究C(2009-2011)「インド商業集団(マールワリー)の研究、グローバル経済と地域社会の結節点として」(研究代表者 中谷純江)並びに新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」(2008-2012年度)の成果の一部である。中でも「インド商業集団(マールワリー)の研究」の数回に及ぶ研究会における同科研メンバー(中谷純江、豊山亜希)との議論は、論文を作成する上で大きな刺激と助力となった。

註

- 1) 訳はすべて論者によるものである。なお本論でのヒンディー語のローマ字転写はALA-LCで定められた規則に従って行う。
- 2) 1920年代からヒンディー語の地位は変化し始め、ナショナリズムの高まりとともに「national language」としてインドの広い範囲に普及した。その際、媒体としての雑誌の役割は非常に大きなものであり、アラハバードはそれらヒンディー語雑誌出版の中心地を担った[Orsini 2002: 特にChapter 2]。チャンド誌は当時のヒンディー語圏におけるミドルクラス家庭で最大の人気雑誌であり、他のヒンディー雑誌の二倍の売れ行きを誇った[Schomer 1983: 182]。しかし15,000部という発行部数を誇った1930年代のピーク時をすぎると徐々に人気を失っていき、1949年に廃刊となる。またSchomerによればチャンドは厳密には文芸誌ではなく、社会問題を取り扱った最初の雑誌であったが、ヒンディー文学界において高い評価を受けることはなかった[Schomer: 183-184]。
- 3) サハガルの編集時代(1922-33)、読者投稿欄は非常に充実しており多い時で一号に10通以上の投稿が掲載されていた。これは1933年にサハガルが引退した後、次第に減少していき1935年以降は投稿欄そのものがなくなってしまふ。
- 4) また読者の性別も読者投稿の内容やそこに記された名前を元に論者が判断する限り、男女比は約7対3の割合で男性が多い。この割合に関しては当時の女性識字率にも留意する必要があるだろう。1921年センサスによればインド全体の女子識字率は0.6%であった。男性が購入し家族で読む、あるいは学生が学校などの図書館で読むパターンも多かったと思われる。

- 5) 特集号にはそれぞれ編集長が立てられ、200-300 頁というボリュームで一冊 1～1.8 ルピーであった。多様なトピックが扱われたがその完成度にはばらつきがあり、評判となったのは不可触特集ならびに絞首刑特集、そして本論で扱うマールワリー特集のみであるといえよう。また不可触ならびに絞首刑特集号は高く評価され、2000 年代前半に復刻出版されている。
- 6) 特に 1930-31 年には kongress のメンバー、指導者、女性活動家の写真が毎号のように多数掲載された。1931 年 6 月号には 20 頁以上に渡って写真が掲載されている。
- 7) この記事は 1930 年 1 月号 (p. 530) において再掲載されており、本論では再掲載時のものを参照した。
- 8) ハードグローヴはこの編集について、Rishi Jaimini Kaushik Barua 氏との会話を元に「おそらく Rajagopal Mohatta によるものである」としている [Hardgrove 2004: 206]。
- 9) 特集号目次は以下のようなものである：
○寄稿記事：マールワールの近代的状況／マールワリー女性／カルカッタにおけるマールワリーの社会生活／マールワリーの若者たちへ／マールワリージャーティにおける社会改革／カルカッタのマールワリー社会改革者／マールワリーの衣服／マールワリーと商業／マールワリーのことわざ／マールワリー社会描写／マールワールの唄 etc.
○編集記：マールワールのマハラジャたち／マールワリー文学／マールワリーの長所と短所／パルダ／節制の欠如 etc.
- 10) 「大都市で自家用車に乗るような紳士たちが、故郷の村で貧困にあえぐ人々を同胞だとみなさないのならば、彼らの飢えに同情しないのならば、そして彼らの苦しみに目をやらないのならば、その紳士たちを愛国者だと呼ぶことができるだろうか？」[CM: 2-3]、「過去、マールワリーたちの身体には自国愛、滅私そして信仰心が燃え盛っていた……（中略）しかし今や！マールワリーたちのあの力強さや勇敢さは一体どこへいった？今やマールワリーは、臆病もの、賄賂まみれ、吝嗇、高利貸しの代名詞となっている！」[CM: 192-194]
- 11) 2005 年から現在にかけて、1910 年代からインド独立までの主要ヒンディー語雑誌 (*Cānd, Sudhā, Sarasvatī, Mādhurī, Strī Darpaṇ, Gṛhalakshmi* など) 約 750 部を調査。
- 12) ここで揶揄されているとおり、当時カルカッタ在住マールワリーの英語識字率は低かった。しかし彼らが非識字であったわけではない。1921 年センサスにはベンガルのエリート層に匹敵する識字率が示されている [Timberg 1978: 67]。ハードグローヴによれば彼らはヒンディー語普及活動に熱心であり、ヒンディー新聞や雑誌など印刷文化の発展に寄与した [Hardgrove 2004: 54-55]。彼らの経済力に支えられ、カルカッタはヒンディー語出版の初期中心地であった [Orsini 2002: 63]。
- 13) 書き手に関しては今後より詳細な研究が必要とされ、同時に編集者をめぐるハードグローヴの論拠の解明にも努めたい。
- 14) 掲載された 33 名分のマールワリー・ポートレイトのうち、活動場所が記載されているものが 23 名。そのうちカルカッタ在住は半数以上の 16 名であった。
- 15) 1901-11: 182 人、1911-21: 524 人、1921-31: 1132 人。
- 16) マールワリーは元来 *Burabazar* にて集団で居住してきた。しかし第一次大戦頃から裕福なマールワリーたちの中に、同エリアを離れて新たに住居を構える者が現れた [Hardgrove 2004: 65]。それは土地の人々の目に居住者マールワリーが触れやすくなったことを意味しよう。
- 17) ベンガル人は 19 世紀よりイギリス支配がもたらした新しい情勢にいち早く対応し、新しい文化と社会の発展を担ってきた。新しい動きの最大の中心地で都市文化を形成してきた彼らと、地方から移住してきたばかりのマールワリーとの間で、文化的な齟齬や摩擦が生じたことは容易に想像できよう。
- 18) この点に関するハードグローヴの以下の指摘は興味深い。「(同じく経済的に成功したパルシーとは異なり) マールワリーは、英国人をモデルとして同化しようとは決してしなかった。」[Hardgrove 2004:

- 53] ここにもまた自己表象と他者表象との齟齬が現れている。
- 19) チャーンド誌以外では *Bhārat* 1929 Dec 2 (pp. 6–7)、1929 Dec 9 (pp. 6–7)、*Mādhurī* 1930 Jan (pp. 1042–1044)、1931 Jul (pp. 833–841)、*Mārvār ke Manohar Gīt; Cāñd ke ‘Mārvārīaṅk’ kā Uttar* 1987 などにおいて批判が掲載された。またチャーンド誌上では投稿された批判とそれに対する反論、あるいは特集号への支持が以下の号に掲載された：1930 Jan (pp. 530–542, pp. 542–544)、1930 Feb (pp. 754–757)、1930 Mar (pp. 862–868, p. 882)、1930 Apr (pp. 968–971) など。
- 20) もっともサハガルの引退に関しては健康上の理由であったとする説もある。

主要参考文献

Hindi Journals

Cāñd / Bhārat / Mādhurī

Books&Articles

(日本語)

小松久恵、2012 (出版予定)、「アメリカ人が描いた20世紀初めインドの輪郭——『マザー・インディア』を読む」、奥山直司・田中雅一 (編)『コンタクト・ゾーンの人文学 4』、晃洋書房、83–100 頁。

(Hindi)

Bajāj, Jānakī, 1965, *Merī Jīvan-Yātrā*, Nāī Dillī : Sastā Sāhitya Maṅḍal.

Śrīdhar, Vijayadatt (ed.), 2008, *Bhāratīya Patrkāritā Kosh Khand 2*, Nāī Dillī: Vāni Prakāśan.

Ṭaknet, D. K., 1990, *Mārvārī Samāj*, Jaipur:Kumār Prakāśan.

Tripāṭhi, Ramnareś, 1987, *Mārvār ke Manohār Gīt; Cāñd ke ‘Mārvārīaṅk’ ka Uttar*, Prayāg: Hiṅḍī Maṅḍir.

(English)

Agrasenputra, R., 1940, *The Marwari Leaders of India*, Calcutta: The Lajpatrai Publishing.

Birla, Ritu, 2009, *Stages of Capital: Law, Culture, and Market Governance in Late Colonial India*, Durham and London: Duke University Press.

Hardgrove, Anne, 2004, *Community and Public Culture: The Marwaris in Calcutta*, New Delhi: Oxford University Press.

Komatsu, Hisae, 2005, “Women of Virtue : A Case Study of Janakidevi Bajaj (1892-1979),” in Unita Sachidanand and Teiji Sakata (eds.), *Imaging India Imaging Japan: A Chronicle of Reflections on Mutual Literature*, New Delhi: Manak Publications.

Millman, Harry Abram, 1954, “The Marwari: A Study of a Group of the Trading Castes of India,”

- Master's thesis, University of California.
- Orsini, Francesca, 2002, *The Hindi Public Sphere 1920–40, Language and Literature in the Age of Nationalism*, New Delhi: Oxford University Press.
- Schomer, Karine, 1983, *Mahadevi Varma and the Chhayavad Age of Modern Hindi Poetry*, Berkeley: University of California Press.
- Timberg, Thomas A., 1978, *The Marwaris: From Trader to Industrialists*, New Delhi: Vikas Publishing House PVT LTD.